



Just Composed in Yokohama シリーズは、毎年、若手作曲家に作曲委嘱し、

同時代音楽の紹介に積極的な演奏家を迎えて、現代の旬の音楽を紹介するコンサートです。

9 回目を迎える今回のコンセプトは、“和楽器”。委嘱作曲家は山根明季子さん。その山根さんと、

尺八演奏家の藤原道山さんが顔をあわせました。

対談

## 藤原道山(尺八) × 山根明季子(作曲)

愛用の尺八を何本も抱えてあらわれた藤原道山さん。お洒落でナチュラルな雰囲気山根明季子さん。とても現代風なイメージのおふたりが自然体で語り合うと、尺八のモダンな表情が覗き始めました。

### 「尺八らしい」と「尺八らしからぬ」

山根：尺八のための作曲をするのは初めてなんです。今回はなるべく「尺八らしからぬ」音楽を追求してみたいと思っています。

道山：それは嬉しいですね。

山根：私は西洋音楽の世界にもともと馴染んでいましたから、尺八は、フルートと比べてノイズな音色だと思っていたのですが、道山さんのCDを聴いて初めて、雑音の少ないきれいな音色も出せて、いろいろな表情をもった楽器なんだと思ったんです。そこに魅力を感じたのですが、そのような魅力からもまた、あえてはみ出して行こうと考えています。

道山：それは楽しみです。尺八は、見てのとおり、竹筒に指穴が5つ、以上、定義終わり(笑) ----と言ってしまえるほどシンプルな楽器です。ほら、こうして覗くと向こう側が見える、ただの竹筒です。極限とも言えるほどシンプルであるだけに、思ったことを思っただけ自由に引き出していける楽器です。だから今回、山根さんという、初めて尺八に接して下さる方がどういうイメージを育んでくれるかによって、僕のイメージも膨らんでいきます。この楽器の可能性がさらに広がる嬉しい機会です。

### 感情と音色、雑音ときれいな音

山根：先日にもレクチャーしていただいたのですが、シンプルと

おっしゃるけれども、とても奥の深い楽器でもありませんよね。演奏法で複雑な音色が出せますよね。

道山：演奏法のポイントはごく簡単に言うと三つあります。まずは息。息の調整によって、音量はもちろん、音色も変化します。みなさんがふつうイメージしている「尺八らしい」音色は、こういう雑音の多い音でしょうね。それから先ほどきれいな音と言っていたような雑音の少ない澄んだ音まで、口と息の操作によって作っていきます。二つ目は指。指穴を半分開けたり4分の1開けたり、それを組み合わせたり、表で開けておいて裏でまた塞いでとか、そういう微妙な操作によって音を作っていきます。三つ目が首の操作ですね。

山根：首を使うことは、一番特徴的ですね。

道山：そうですね。首の操作によって音の高さを変えたりピブラートを付けたりします。実際に音を出してみますと…このように音程を変えることができてしまいます。それから「揺り」と言ってピブラートですね。横方向だけではなく、縦に揺ると、音程も変わります。縦と横を複合したり、首を回すことによって唸るような効果が出てきたり。楽器自体を揺る「竹揺り」という方法もあります。この三つの技法をいろいろ複合して演奏しています。だから同じ指遣いでも音程や音色が変わったり、同じ音程の音でも首の操作によって音色を変えたりという事ができるのです。日本の楽器というのは音色を非常に大事にしていますよね。

山根：以前、「能の謡」を用いた楽曲を作ったのですが、日本の伝統的音楽表現に共通する魅力でもありますよね。

道山：洋楽器というのは、例えばフルートだと雑音のない音色だけを出しなさいって決まり事がまずあるでしょう。でも最近現代音楽では、それに逆らって、あえてノイズを出したりする事を新しい技法だと言ったりしています。尺八から見れば妙な感じですが、雑音の少ない音と雑音の多い音との対比に感情を見いだすのが日本の楽器の特徴の一つでしょうか。雑音のない音から急

に雑音の多い音に行くとハツとする。ノイズを含む音も出せることで、感情の起伏を表現するのでしょうか。

### 藤原道山という個性とともに作曲する

山根：今回、私が作ろうとしているのは、ただ漠然と尺八について書くのとはまったく違います。藤原道山さんという音楽家とのコラボレーションです。以前に道山さんが現代音楽を演奏している姿を拝見したことがあって、現代音楽の演奏もとても素晴らしかった。大きな信頼を寄せつつ、ごいっしょできてとても光栄に思います。「尺八」というよりは「道山さんの演奏」を思い浮かべて作曲するつもりです。

道山：ありがとうございます。どんな作品になるのでしょうかね。

山根：今は、私自身が「こういう音が聴きたいな」という音を探している最中です。初めての楽器なので、いろいろと試行錯誤をさせていただくかもしれない。

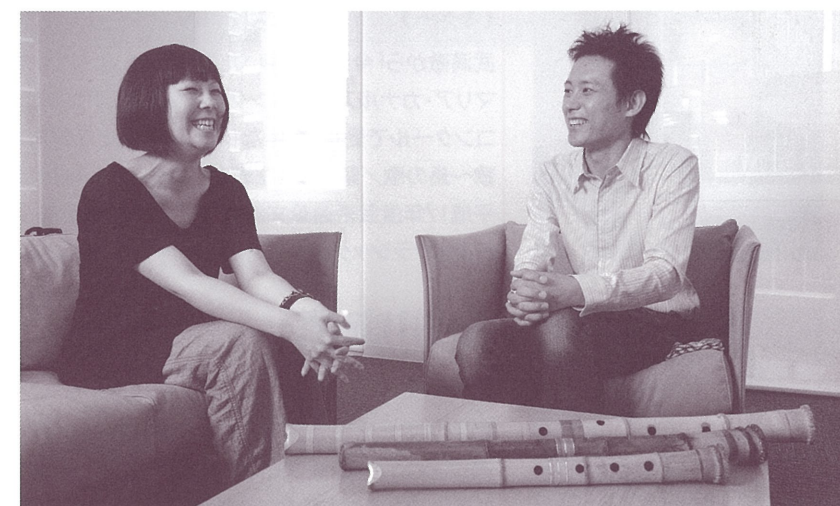
道山：大歓迎です。作曲家の方が思い描いてつくろうと思っている音が、的確に表現されるようにするのが、僕のつとめですから。

山根：でもあえて日本の伝統だとか、邦楽器であることはあまり意識せずに、ありのままの日本人の空気、今生きている日本の空気感を出せればと思っています。

道山：それはきっと出てくるでしょう。音楽は母国語が非常に大きく関与していると思います。英語圏の作曲家の作品だと英語の音がするし、フランス語圏の作曲家だとフランスの音がする気がします。やはり日本人の作曲家だと自然な日本の音になってきますね、日本語の音というべきか。

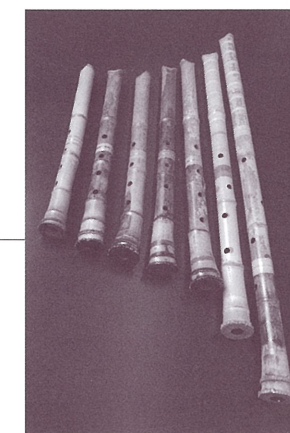
山根：日本語も、昔と今では移り変わっていますね。日本の伝統楽器を用いた作品でありながら、本当に今現在ある、私たちににとっての日本の等身大の姿を追求したいと思っています。

道山：それが、僕たちが「現代音楽」をつくりだす意味ですね。



だから聴き手の方も、今聴こえてくる音から感じられることを素直に受け取ってもらいたい。僕の演奏はよく「尺八のイメージが変わりました」って言われますが、でもそれまで持っていた尺八のイメージというもの、きっと漠然としたものにすぎないはずだと思うのです。だから先入観を取り払って、勇気を出して一歩踏み出してコンサート会場まで来てもらえればいいなと思います。聴こえた音から何か風景が見えてきたり、逆に刺激されて自分の経験にはなかったものを発見できたりする。気楽に足を運んでいただきたいですね。

山根：よく初演時の作曲家の心境を聞かれるのですが、私の場合はとてもドキドキします。演奏中作曲家は自分ではどうすることもできないので、子どもが生まれるときの父親の心境なのではないかと勝手に想像しているのですが(笑)。自由な感覚で聴きにきていただければ、と思います。



藤原道山さんがこの日説明してくれた7本の尺八。一番短いものは1尺4寸、一番長いものは3尺1寸。標準的な長さは1尺8寸のもの(右から4番目)。



藤原道山  
Dozan Fujiwara

10 歳より尺八を始め、人間国宝・山本邦山に師事。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業、同大学院音楽研究科修了。在学中には御前演奏を務める。2001年アルバム「UTA」でCDデビュー。以来、「空 - kû -」、トラディショナルアルバム「壺」、「かざうた」、今年5月には、ピアノ/妹尾武、チェロ/古川展生でのユニット「KOBUDO - 古武道 -」を結成、「KOBUDO」をリリース、計7枚を発表。また、坂本龍一、ケニー・G、野村萬斎などのアーティストとのコラボレートを積極的に行うなど、幅広く活動。映画「武士の一分」ではゲスト・ミュージシャンとして音楽に参加。ウィーン・フィルメンバーによるスペシャルアンサンブルと共演。  
<http://www.dozan.jp>



山根明季子  
Akiko Yamane

Just Composed 2008 in Yokohama 委嘱作曲家。1982年大阪府生まれ。京都市立芸術大学音楽学部作曲家専攻卒業、同大学院修了。在学中プレーメン芸術大学に派遣留学。第5回武生作曲賞入選、同音楽祭に招待作曲家として参加。第23回日本現代音楽協会作曲新人賞入選および富樫賞。ロワイヨモン Voix Nouvelles2006(フランス)に招待参加。2006年度日本音楽コンクール作曲部門第1位および明治安田賞、増沢賞。これまでにストラスブール打楽器アンサンブルとのコラボレーション、カンパニー IZURU による「能」を題材とした委嘱作品など。作曲家・川島素晴と共にコンサートシリーズ「eX」主宰。京都現代音楽アンサンブル「COTO PRESENT」プロデュース。  
[http://www.komp.jp/akiko\\_top.html](http://www.komp.jp/akiko_top.html)